東南アジア研究　23巻1号　1985年6月

ジャワでの都市部への人口移動の背景と属性*

川　元　岩　夫**

Background and Characteristics of Migration to Urban Areas in Java*

Iwao KAWAMOTO**

The populations of Javanese cities have grown mainly due to the inflow of migrants from the rural areas, as well as by natural increase. Behind this inflow, there is an overpopulation of laborers in the rural areas. However, there are also migrants from other urban areas. Actual movement cannot be fully understood solely in terms of the escape from poverty that it offers.

Many studies have been made about migrants who work for the informal sector, because various social problems are concentrated in the poor class. This article aims to compare the background and characteristics of movement between laborers in the informal sector (housemaids) and laborers in the formal sector (factory laborers in a Japan-Indonesia joint venture), also between migrants from rural areas and migrants from urban areas. This comparison makes it possible to see the inflow of migrants to urban areas as a whole, and gives some indication of what efforts migrants make to live through a difficult period.

I　はじめに

自然増加と外部からの流入により，都市人口は増加し，都市計画不備の場合，いろいろな都市問題が起こってくる。ジャワ[1]においては，農村部からの人口移動が，都市人口を急増させるものとして警戒されている。かぎりある農地で人口だけが増え，そしてそれが過剰労働人口を生み，都市部へ流出していく潜在力となっていると考えられているのである。しかし，この過剰労働人口は都市部にも存在し，他の大都市への流入を生じている。現在，ジャワは，都市問題を可能なかぎり回

* この稿は，1983年7月，インドネシア大学経済学部人口問題研究所に提出したものを一部削除し，書き改めたものである。
This paper is a revised edition of an original essay presented at the Institute of Demography, Faculty of Economics, University of Indonesia in July 1983.

** 〒892鹿児島市吉野町803-9; 803-9 Yoshino-cho, Kagoshima-shi 892, Japan

1) 人口10万以上の都市のうち，1970年代の人口成長率2.32％を越える人口成長をみせた都市は20あり，そのうち15が州都である。これらの州都は人口移動の目的地になっているといえよう。人口10万以上の都市に居住するのは，インドネシアでは，1961年に10.2人にひとり，1971年8.8人にひとり，そして1980年に7.5人にひとりとなっており，ジャワでは8.8人，7.5人，6.6人にひとりであり，スマトラ，カリマンタン，スラウェシ全体では，11.5人，10.1人，7.7人にひとりである。都市への人口集中が経済発展段階をあらわすバロメーターだとすれば，ジャワは，インドネシア全体から10年抜き出ており，外島よりも10年以上(15年ぐらいか)進んでいるといえようか。

避しながら，過剰労働人口を都市部を含めてどこに吸収していくか，その成否により，経済開発のうえで必要とされる人的資源の効率的配置を可能にし，政治の安定と秩序を生み，またその逆もあり得るという緊張下にある。[2)]

以上のことから，どういう社会経済的状況におかれた人が都市部へ流入してくるのか，また彼らはどういう属性をもっているのかを知る作業は，都市問題にかぎらず，政治・経済開発に関した諸問題を考えていくうえで，不可避なものになっているといえる。

都市への人口移動の社会経済的背景や属性に関する調査は，大学や国の研究調査機関によって，これまで数多くなされてきた。それらの調査の対象は，露天商人や人力車夫といった，インフォーマル・セクターで働く都市下層労働者であり，フォーマル・セクターで働く人々の調査はなされていない。というわけで，今回は，両セクターで働く人々の調査を行い，都市への人口移動の社会経済的背景や属性において，両者の比較を行うことを目的としている。農村部出身者と都市部出身者との比較も同時になされるので，都市への人口流入をより総体的に眺めることができるものと思われる。

II 属性の比較

今回の調査地は首都ジャカルタである。1971年人口センサスによると，出生州から現在居住する州への生涯移動をした人口は570万であるが，そのうち172万（30%）がジャカルタに移り住んできた人たちである。これは，1971年ジャカルタ総人口のうち，40%にあたる人が出生州がジャカルタ外であることを意味している。彼らのうち81%はジャワ（マドゥラ島を含む）生まれである。ジャカルタに流入した人口の平均年齢は19.5歳であるという [Mayling 1977 : 64]。ジャカルタの人口は，1930年53万台，1948年82万台であるが，2年後の1950年には143万台と，およそ61万も増加し，独立戦争終結以後人口は急増しているようである [Suharso *et al.* 1981 : VII]。そして，1971年460万，1980年には650万に脹れ上がり，西暦2001年には1,000万から1,100万ぐらいになると推算されている。

インフォーマル・セクターのサンプルとして，メイドを選択した。理由は，メイドが都市低階層に属し，また，農村部出身者が多いからである（メイドは，調査時点——1982年7月から9月にかけて——でこれまで調査されていない）。調査は，南ジャカルタ地区にある，クバヨラン・バル（Kebayoran Baru），クバヨラン・ラマ（Kebayoran Lama），そして，トゥベット（Tebet）で行なった。この3地域（後二者には新興住宅街になっているところもある）には，インドネシア人の大きな家屋が建ち並び，外国人に賃貸されている家屋も少なくない。実際，外国人の多くはこれらの地域に住んでいる。今回の調査のメイド（計80人）は，日本人家庭（計50世帯）で働いていた人々である。世代間に存在するであろう社会経済的背景の違いの混同を避けるため，25歳以下という年齢制限を設けた。データ収集の方法として，インタビュー方式を採用した。

フォーマル・セクターのサンプルとして，

---

2) 外島の地域開発と労働力不足，そしてジャワ農村の貧困からの脱出のため，外島への移住がインドネシア政府のプロジェクトとして進められている。移民省大臣ハルン・ザイン（Prof. Harun Zain）によると，「ジャワ，バリ，ロンボックには，0.25ヘクタール未満の土地を耕作している農家と，全く土地をもたない農家が，計1,300万戸あり，これらの農家は外島へ移住させられる必要がある」という [*Kompas* May 28, 1982]。

工場労働者を選んだ。それは，彼らがメイドよりも上の階層に属し，また，近代的職種だからである。調査は，一つの日系合弁企業の協力のもとに行われた（1983年4月初旬）。ジャカルタ特別地区と西部ジャワ州の州境に近い，ジャカルタ特別地区内のチラチャス(Ciracas）に工場（事務職員を除いておよそ1,270人——男子740人，女子530人——の工場労働者が働き，ズボンや服の生地を生産している）はあり，工場労働者は，このチラチャスやその周辺一帯，ジャカルタの別の地区，あるいはボゴールなどに住んでいる。当初データ収集の方法としてインタビューを考えていたが，もろもろの理由で難しく，アンケート方式を採用した。回収率をよくするために，社内食堂に集まった工場労働者にアンケート用紙を配布し，昼食時間のうち15分を使って回答してもらい，その後すぐにすべてを回収するという方法をとった。これで，すべての生産工程で働く人に配布し，すべてを回収できた。また，回答率をよくするために無記名方式にした。しかし，用紙1ページめの職歴，2ページめの親の職業・親の住所・移動歴などの項目に対する回答率が十分ではなかった。回答時間不足のためであろうか。この工場は1972年から操業しており，その年の採用は男子だけで，女子の採用は1974年からである。採用上の年齢制限は，男子18〜25歳，女子18〜22歳となっている。初回の採用以来働いている男女は，35歳と30歳ぐらいになっていると思われる。この調査では年齢制限を設けなかったので，先の年齢の人もアンケート調査に参加している。当初，1980年以後に採用された人々へのアンケート配布を考えていたが，工場外で昼食をとる人も多く，彼らに十分に用紙がいきわたらないことを危惧して，実現しなかった。

工場労働者の出生地と，採用以前の彼らの両親の住所は，1980年人口センサスで使用されたところの，都市地域と農村地域を区分する地図を利用して確認された。この作業が必要になったのは，都市名と農村名をともに記したケースが少なくなかったためである。そういうケースでは，都市部出身者が記すべき都市名の空白欄のところに，都市部出身者も農村部出身者も県名（kabupaten）を記していた。性別や出生地の不明，養子，そして二重回答などの理由で，200のうち16のアンケートがはずされたが，この調査に影響はないと思われる。

この工場では，未婚が採用条件の一つになっているが，実際には男子の一部（7.4%）が既婚であった。これは，未婚という条件が男子採用において女子ほど厳しくないからである。メイドの大部分（96.2%）は，ジャカルタ流入以前未婚であった。また，宗教についてであるが，この調査のサンプルのうちイスラム教信者が占める比率は，メイド97.5%，女子工94.2%，男子工93.4%であり，ジャワのイスラム教信者の比率とほとんど一致しており，宗教的偏りはない。

1．出身地

表1は，工場労働者とメイドの出身地を示している。この表から，出身地を離れジャカルタで働いている人が多いことがわかる。出生地の点からいっても，また，親の居住地別にみても（親の居住地の不明な者が，決して少なくないのだが），以下のことがいえる。工場労働者の場合，男女とも中部ジャワ出身者がもっとも多く，つづいて，ジョクジャカルタ特別区，西部ジャワそして東部ジャワの順である。メイドの場合もまた，中部ジャワ出身者がもっとも多く，つづいて，ジョクジャカルタ特別区，東部ジャワそして西部ジャワの順である。中部ジャワとジョクジャカルタ特別区の出身者が多いのは，この両州内にある都市が，ジャカルタやスラバヤなど

表1　出身地

			西部ジャワ	中部ジャワ	ジョクジャカルタ	東部ジャワ	合計	ジャカルタ	不明
メイド		農村	3	45	15	10	73	1	
		都市		2	2	2	6		
		%	3.8	59.5	21.5	15.2	100.0		
女子工	出生地別	農村	3	11	13	1	28		
		都市	4	7	2	2	15	9	
		%	16.3	41.9	34.9	7.0	100.1		
	親の居住地別	農村	2	10	12		24		7
		都市	1	6	2	1	10	11	
		%	8.8	47.1	41.2	2.9	100.0		
男子工	出生地別	農村	9	22	10	9	50		
		都市	8	8	6	5	27	45	
		%	22.1	39.0	20.8	18.2	100.1		
	親の居住地別	農村	5	17	7	8	37		16
		都市	7	5	6	3	21	48	
		%	20.7	37.9	22.4	19.0	100.0		

(注)　4人の女子工と6人の男子工は，出生地がジャワ外島であったため，この表には含まれていない。メイドの出生地と親の居住地は同じである。工場労働者の親の居住地は採用以前のものであり，メイドの親の居住地は調査時のものである。

とくらべて，都市流入の吸引力のうえで力不足であることを示している。ジョクジャカルタ特別区の1980年人口センサス時の人口は，西部ジャワの総人口の10.0%，中部ジャワの10.8%，そして東部ジャワの9.4%にすぎないが，この調査では，ジョクジャカルタ特別区出身者の占める割合が高い。これは，この州が人口密度が高いうえに，経済開発を先導していくうえで軸となるべき産業が存在しないためである。当初，ジャカルタの隣州であるため，西部ジャワ出身者の占める割合が他の州よりも高くなるだろうと予想していた(1971年人口センサスによると，ジャカルタへの生涯移動のうち西部ジャワ出身者が42.8%を占め，中部ジャワ28.0%，ジョクジャカルタ特別区3.3%，東部ジャワ6.7%となっている)。しかし，実際にはその割合は低い。おそらくこれは，近年西部ジャワの若い世代は，バンドンやボゴール，そしてジャカルタ特別区との州境に近いタンゲラン (Tanggerang) などの工業地帯へ移動しているからだろう。東部ジャワ出身者の割合が低いのは，ジャカルタからいちばん遠いという距離的事情とともに，自州内のスラバヤ（インドネシア第2の都市）に移動するからであろう。また，男子よりも女子の割合が低いことには，女子は男子よりも近距離地（スラバヤ）へ移動するという傾向がみてとれる。

ジャワ農村部出身者は工場労働者のおよそ65%――数値は表1に示されていないが，出生地別では，男子64.9%，女子65.1%，親の居住地別では，男子63.8%，女子70.6%――を占め，都市部出身者は35%である。一方，メイドの場合，農村部出身者はおよそ92%であり，都市部出身者は8%にすぎない。明らかに，農村部出身者の比率はメイドにおいて大きい。しかし，これはメイドにかぎったことではなく，他のインフォーマル・セクターにもあてはまり，都市部出身者の比率は，フォーマル・セクターにおいて大きくなるものと思われる。これに作用しているのは，都市農村間の教育水準の差であろう。

2．移動回数

出生地からジャカルタに移動するまでの州境を越える移動回数を表2は示している。前にも記したように，この移動歴についての質問の回答欄をうめなかった人が少なくなかっ

表2　出生地からジャカルタ流入までの移動回数
(移動は州を単位とする)

回数		メイド 農村	メイド 都市	女子工 農村	女子工 都市	男子工 農村	男子工 都市
1回	確実	66	5	17	9	29	15
	不確実			10	3	15	10
2回	確実	3	1	1	1	1	
	不確実				1	3	
3回		4			1	2	1
4回							
5回							1
合計		73	6	28	15	50	27

(注)　1回めでジャカルタ流入した比率
女子工の場合
26(確実)÷29(確実)×100≒89.7
39(確実，不確実)÷43(確実，不確実)×100≒90.7
男子工の場合
44(確実)÷49(確実)×100≒89.8
69(確実，不確実)÷77(確実，不確実)×100≒89.6

た。そういうケースのうち，出生地と親の居住地が異なるケースは最低2回移動（出生地から親の居住地へ，それからジャカルタへ）したものと考え，また，出生地と親の居住地が同じケースは初回の州境を越える移動（出生地からジャカルタへ）でジャカルタに流入したものと処理して，この表を作成した。この表の“確実”というのは回答欄をうめたケースをあらわし，“不確実”というのはうめなかったケースをあらわしている。確実なケースのなかで，初回の州境を越える移動でジャカルタに流入した人の比率は，およそ90%である。また，確実なケースと不確実なケースをあわせても，同じくおよそ90%である。メイドの場合も同様な数値を示している。以上のように，この調査のサンプルの大部分は，初回の州境を越える移動で，出生地の州からジャカルタに流入しているといえる。そしてこのことは，他のフォーマルあるいはインフォーマル・セクターの職場で働く人々にもあてはまるだろう。州内移動をチェックしていないが，彼らは移動を繰り返してきた烏合の衆ではなく，彼らの大部分は初回の移動（州内州外を問わず）の目的地をジャカルタと定めて移動した人々だとみてよいと思われる。

3. 移動の動機

イダ・バグス・マントゥラは，離村を阻止する社会心理学的障壁として，①社会的事業や慣習的儀式に対する連帯意識，②土地とのつながり，③家族・同胞・友人などとの人間関係，④低学歴による就業機会の狭さをあげているが［Mantra 1974：4-5］，それでは実際の離村あるいは離郷の動機は何なのだろうか。メイドと移動歴の質問に応えてくれた工場労働者の，ジャカルタ流入の動機が表3に示されている。主たる動機は仕事探しで，男子の77.6%，女子の86.2%にものぼり，メイドの場合はそれより低く58.9%である。1950年代のジャカルタ流入人口の調査による

表3　ジャカルタ流入の動機
(出生地別)

動機	メイド 農村	女子工 農村	女子工 都市	男子工 農村	男子工 都市
親に随行		1			3
友人・同胞・親戚に随行	7		1		
雇主に随行	1				
進学	2	1	1	3	1
個人的希望[a)]	18				
仕事探し	43	16	9	27	11
仕事/転勤				1	2
その他	2[b)]				
不明				1	
合計	73	18	11	32	17

(注)　a) 楽しいことを探す，ジャカルタへいってみたかった，経験など。
b) 親から結婚を強制され，それから逃れるため家出。

と，農村部出身者の場合，財政的圧迫 42.7%，収入の向上 19.8%，地位に対する不満 11.9%と，経済的な動機が74.4%を占め，一方，都市部出身者の場合53.4%で［Heeren 1955：36］，先の仕事探しを経済的範疇に入れれば，30年前も今日も，移動の動機に基本的な差異はないとみてよいだろう。ただ，メイドの次の動機である，楽しいことの追求とか，経験を積んでみたいとか，あるいは，単にジャカルタへいってみたかったというような個人的希望（24.7%）[3] は，1970年代経済開発期のマス・コミュニケーションの発達を背景としているように思われる。

学校に入るということでジャカルタに流入したふたりのメイド（親は農民）は，結局は学校に入っていない。同じ動機の女子工場労働者（親は国軍を定年退役）は職業高校まで進み，もうひとり（親は農民）は普通中学まで進んでいる。男子の場合，3人（親は熟練工，国家公務員，不明）は普通高校まで進み，そしてもうひとり（親は村役場書記）は職業高校まで進んでいる。このように，学校に入ることが動機でジャカルタに流入した人の親の職業はさまざまであるが，高校まで進んだ人の親は，それぞれの地域で高い地位にある人であると推測される。[4]

ジャワ農村部からの人口移動のもう一つの形態である外島移住と比較すると，移動の動機に少なからず違いを見出せる。政府の移住プロジェクトによる外島移住者（ふつう，既婚者とその家族を対象とし，移住後1世帯あたり2ヘクタールの土地が支給されることになっている）の動機には，無所有土地 49.5%，生活改善26.2%，家族への追従9.6%，治安不良 2.3%，その他 12.0%などあるという［Heeren 1979：58］。このなかで，無所有土地という動機は，仕事探しと同じく経済的背景をもつとしても，異質なものといわねばならない。これは，ジャカルタと外島への移動人口構成に違いがあるからであり，[5] 移動の型そのものが異なることを示しているようである。[6]

仕事探しが目的で流入したメイドのなかで，出身地で仕事探しをしたのは4人であった。しかし，みつからず，あっても十分な収入を望めなかったようである。表4は，残り39人の出身地で仕事探しをしなかった理由を示している。十分な収入のある仕事がないということと，先の個人的希望が同比率で，33.3%を占めている。他の理由などは，離村

---

3) スラバヤでの別の調査では，仕事探し45.9%，個人的希望31.7%となっている［Ajik 1983：22］。

4) 灌漑つき水田所有面積別に移動動機をみると，男子の場合，面積が広くなるにつれて仕事探しの比率は小さくなり，生活改善および進学の比率が大きくなる傾向があるという。一方女子は，1ヘクタール以上の場合，生活改善および進学の比率がいちばん大きく，両親・夫あるいは家族への随行，仕事探しとつづき，1ヘクタール未満の場合，両親・夫あるいは家族への随行の比率がいちばん大きく，生活改善および進学，仕事探しとつづくという［Redmana 1977：60］。

5) 1971年と1980年の人口センサスによれば，外島に居住するジャワ生まれの人口は177万9千人増加しており，ほぼ同期間の移住プロジェクトによる移住者63万4千人が含まれていると思われる。彼らがどのような人から構成されているのか知り得ないが，筆者が得たサンプルの多い（13,386人）統計によると，小農民・農業労働者84.9%，職人・労働者7.9%，元公務員・軍人5.2%，商業従事者1.4%，その他0.8%となっており，また，学歴では，文盲 29.9%，小学校の教育を受けた者64.5%，中学・高校 5.5%，それ以上0.1%となっている［Indonesia 1978：3］。元公務員・軍人は，移住地で村の行政機構整備や治安維持の指導にあたるために移住させられているときく。

6) ジャカルタへの転出者の出身世帯の平均所得は高く，移動は立身出世型であるのに対して，スマトラへの転出者のそれは低く，没落回避型という傾向差があるという［加納 1981：172］。

表4　メイドが農村で仕事探しをしなかった理由

理　　由	メイド N	メイド %
個人的希望	13	33.3
仕事がない／あっても収入が少ない	13	33.3
とくに理由なし	5	12.8
農村で働きたくない	3	7.7
親がジャカルタに出ていくように希望	2	5.1
その他	3	7.7
合　　計	39	99.9

が抵抗なくジャワ農村社会に受け入れられていることをあらわしている。その背景には，生産的な就業機会不足という現実がみてとれる。

4.　学歴

就業機会不足を人口センサスや労働人口調査などのマクロ・データ（表は省略）に照らしてみれば，都市部でも農村部でも，中学以上の教育課程を修了して新規参入した労働人口のあいだで，学歴相応の就業機会，あるいはよりよい生活を求めての厳しい競争があることがわかる。このことと，中学卒以上から転出率が高くなり，学歴が高ければ高いほど，転出率も高くなる［Wirosoehardjo 1978：20］ということとは無関係ではないだろう。1971年人口センサス時の10歳以上のジャカルタ人口の学歴構成を出生州別にみると，ジャカルタ外出身者のその構成は，ジャカルタ出身者よりもはるかに高く，また，当の出身地住民よりも高くなっていることがわかる［Indonesia 1974：107］。これは，ジャカルタで生活していくうえで少しでも成功するために，より高い学歴が必要とされるからであると説明でき，先の学歴が高ければ高いほど転出率も高くなることも理解できる。

表5　学歴構成

（出生地別，%）

学歴	メイド 農村	メイド 都市	女子工場労働者 農村	女子工場労働者 都市	女子工場労働者 ジャカルタ	男子工場労働者 農村	男子工場労働者 都市	男子工場労働者 ジャカルタ
	73	6	27[a]	15	9	50	27	45
不就学	5.5							
不卒業	38.4	33.3						6.7
小学卒	38.4	16.7	18.5	6.7		4.0	7.4	15.6
普通中・職業中	16.4	50.0	59.3	40.0	44.4			
普通中						20.0	18.5	31.1
職業中						14.0	3.7	4.4
普通高・職業高	1.4							
普通高			3.7	13.3	11.1	22.0	29.6	35.6
職業高			18.5	33.3	33.3	40.0	37.0	6.7
短　大				6.7	11.1		3.7	

（注）　a) 不明ひとり。
ふたりの女子工，ひとりの男子工は，短大に進学している。しかし，人事課によると，彼らは中途退学者である。この表の中学以上の学歴は，中途退学者も含んでいる。

表5は，中学以上の学歴には卒業者だけでなく中途退学者も含んで，メイドと工場労働者の学歴を示している。[7] メイドの場合，小学卒業以下の者（農村部，都市部出身あわせて）がおよそ80%を占めている。しかし，中学中退を小学卒に組み込むと95%にも達する。中学進学者のうち中退が80%（15人中12人）と高かったからである。ただひとりの高校進学者（彼女の祖父は元村長であり，兄は現役の村長である）も中退している。こうして，中学卒は5%（79人中4人，農村部出身3人，都市部出身ひとり）にすぎない。

工場労働者の学歴はメイドよりも高い。女子の場合，都市部出身者の学歴構成と，ジャカルタ出身者のそれがよく似ている。これは，両者の教育程度がほとんど同じというこ

7）採用のためには，知能指数テスト，一般教養試験，面接試験，そして健康診断にパスしなければならない。人事課によると，採用のポイントは工場労働者としての適応性であって，学歴の制限は設けていないという。ただし，高校卒以下。短大卒以上は事務職。

とを意味している。農村部出身者では，中学卒以下が前二者とくらべて高い比率を占めている。これは，農村部の親は子女の教育にそれほど熱心でなく，高くても中学段階までであるという教育環境を明らかにしているようである。一方，男子の場合，農村部と都市部出身者の構成がよく似ていて，彼らの教育程度はジャカルタ出身者よりも高い。これは，彼らが厳しい就職事情を勝ち抜くために，ジャカルタ出身者よりも高い学歴を有していたことを物語っている。

同表で興味深いのは，79人のメイドの57%（小学卒以上の学歴を有する者）が，この工場で採用される可能性をもっていたことである。この工場は採用条件のなかに学歴の制限を設けていないが，他の工場すべてが中学卒以上という学歴制限を設けているとは思われないので，彼女たちは，他のいくつかの工場でも採用される可能性をもっていたことになる。一般的に，メイドはしばらくのあいだ都市で働き，出身地へ帰っていくといわれ，また，学歴が高いほど滞在期間も長いという[Moir 1978：43]。しかし，仕事探しが目的のメイドは，すでに平均して2年半以上も滞在しているのである。ジャカルタ流入以前すでにジャカルタでメイドとして働く同胞（実の兄弟姉妹）がいたのは15%（79人中12人）にもかかわらず，ジャカルタでの最初の職業がメイドであった者が86%（68人）もいた。これらの数値は，メイドという就業機会が比較的容易に探せるということを語っているようである。他のインフォーマル・セクターで働く労働者のなかにも，フォーマル・セクターに就業機会を得る可能性をもっていた者が少なからずいたと思われる。にもかかわらず，彼らがインフォーマル・セクターの職業につくのは，ジャカルタ流入後短期間内に職につかねばならない事情があるからであろう。

職業高校で教育を受けた工場労働者の専攻学科はさまざまである。一般的に，自ら学んだ学科と無関係な職場で働く現象があるという。この調査でもそれは見受けられた。理科系あるいは工学系で学んだ者が，職業高校進学者のうち，女子の31%（ジャカルタと他の都市部出身者38%，農村部出身者20%）を占め，男子の58%（それぞれ62%，55%）を占めてはいる。しかし，繊維学科で学んだ者は男女あわせて職業高校進学者の8%にすぎない。工場労働者の大部分は，自ら学んだ学科と直接関係のない職場に就業機会を得ているといえる。そして，事情は他の工場も同じと思われる。

5. 出身階層

インフォーマル・セクターで働く労働者は，一般的に農村部からの季節労働者や低階層農家世帯の子弟からなっているといわれる。一方，フォーマル・セクターで働く労働者の出身階層や親の職業は知られていない（調査されたことがないからである）。表6は，採用以前の工場労働者の親の職業（父親死亡などの場合は母親の職業）と，メイドのそれを示している。工場労働者の場合，もっとも目立つ特徴は，公務部門で働く親の多いことである。なかでもインドネシア国軍に務めていた親が少なくないのは興味深い。これは，採用において身元保証の確かなことが作用しているからであろう。ジャカルタに親が居住しているケースでは，軍人の親は，公務部門で働いていた親たちの半分近くを占めている。第2の特徴は，インフォーマル・セクターに属すると思われる職人や労働者や商人も高い比率を占めていることである。とりわけ，男子の場合はそうである。これには，自分の息子にはフォーマル・セクターに就業機会を得てほしいという，親の希望があらわれている。自分の娘に対する同様な希望は，イ

表6　親（父または母）の職業構成　　　　（親の居住地別）

	メイド		女子工場労働者						男子工場労働者					
	農村	%	農村	%	都市	%	ジャカルタ	%	農村	%	都市	%	ジャカルタ	%
農民	63	86	15	70[b]	1				11	43[b]	1			
農業労働者			1						4				1	
村役場	4		2						1				1	
公務員[a]			1		4		4	78[b]	8		4		10	44[b]
軍人[a]			1	13[b]	1	70	3		2	31[b]	2	41[b]	8	
教師[a]			1		2				1		1			
私企業事務員													2	
商人	2				1	20	2	22[b]	6	20[b]	2	35[b]	8	41[b]
労務者／職人	1		2	9[b]	1				1		4		9	
不就労	2										3		2	
死亡	1								1					
不明			1				2		2		4		7	
合　計	73		24		10		11		37		21		48	

（注）　a) 定年退職者を含む。公務員のなかには，国営企業で働く者や地方公務員を含む。教師のなかには，私立校の教師もいると思われるが，ここでは，公立校の教師と考えることにする。
b) %は「不明」人数分を除いた計算値をあらわしている。

ンフォーマル・セクターで働く親よりも，公務部門で働く親の方がより積極的であるとみてよいだろう。

メイドの場合，農業を営む親の比率が大きい。これは，出身地のところでみたように農村部出身者が多いことからの当然の帰結であり，インフォーマル・セクター部門で働く労働人口の特徴であるといってよいだろう。その親たちのなかに農業労働者はいず，土地所有者か，あるいは，借地を耕す農民ばかりであった。[8] 村落社会の最下位階層の多くを占めるであろう農業労働者がいなかったのは興味深い。これは，都市部に居住するには適応能力，移動のための経費，そして移住後収入を得るまでの生活費用が必要であり，最下層農家世帯出身者にはこれらを満たすことが難しいからであろうか。[9]

今回の調査のサンプルのなかに，村長の娘ひとりと，区長（dukuh――行政村内の下位単位の長）の娘ふたりがいた。村長も区長もそれぞれ社会的に地位のある人であるが，彼らの娘が，昔は世襲制も伴うこともあったかなり厳格な身分の上下関係にあり，現在においても都市のエリート層が経済的地位の高いことを示すためのシンボルという，依然として上下関係の強く残るメイドとして働いているのは，[10] 都市におけるメイドが，村落では

8) 土地面積のチェックに失敗したが，所有地か借用地かのチェックはでき，農業労働者世帯が一つもないことがわかった。

9) 村外への労働力移動では，農家所得最上位の層の流出（立身出世型）と，中の下の層の流出（没落回避型）が激しく，真に最底辺の階層においては，没落を回避しようにも積極的な回避の策を講じ得ず，ただ村のなかに滞留して最低水準の生活に甘んじる以外に生き様のない世帯が少なくなく，流出比率は小さいという［加納　1981：161-175］。

10) 筆者の下宿のメイドたちの言葉（ジャワ語）と態度は，主人を敬うものであった。

表7　親の職業別からみた学歴構成　　　　　(親の居住地別)

	女子工場労働者									男子工場労働者								
	農村			都市			ジャカルタ			農村			都市			ジャカルタ		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
不卒業																	2	
小学卒	2			1					1	2				2		1	3	1
普通中	11	2	2		1	1			2	2	2	1		1	1		5	2
職業中										2	3			1			2	
普通高	1					2			1	2	2	2		2	3		4	10
職業高	2		1		1	3		2	2	7		8	1		3		1	5
短　大						1			1									
合　計	16	2	3	1	2	7	0	2	7	15	7	11	1	6	7	1	17	18

(注)　A――農民，農業労働者；　B――労務者／職人；　C――公務員，軍人，教師。

身分の低いものとしてみられていないからであるとも考えられるが，むしろここでは，農村部の若い世代がいかに都市あるいは新しいものに魅せられているかを示しているとみるのが妥当であろう。

表5の工場労働者の学歴を，親の職業別にみたのが表7である。親が公務部門で働く工場労働者の大部分は，男女とも高校まで進学している。インフォーマル・セクターで働く親をもつ者には，中学卒以下の学歴の持主が多い。しかし，高校進学者も少ないとはいえない。農村部出身で，かつ，親が農民あるいは農業労働者である者には，男子の場合高校進学者が多く，女子では中学卒以下の者が多い。このように，親の職業が次の世代の学歴に反映している面が見受けられ，フォーマル・セクターで働く親の子弟の学歴は一般的に，インフォーマル・セクターの子弟より高いといえる。また，工場労働者よりも社会的地位が高いと評価されているフォーマル・セクターの他の職業につくためには，さらに高い学歴が要求され，公務部門で働く親の割合が高くなるものと推測される。

1963年と1973年の農業センサスと1980年人口センサスなどのマクロ・データをみるかぎり（表は省略)，0.5ヘクタール未満の農地を耕している農家世帯と，耕す農地がない農家世帯（いわゆる農業労働者世帯）の実数と割合がともに増え，自らの収穫だけでは貧困線以下にとどまる農家世帯が増えていることがわかる。[11]　しかし，残念ながら今回の調査では，農家世帯の所得のランクづけの第1の目安となる土地面積のチェックに失敗し，出身階層を割り出す手がかりを失った。その手がかりを学歴に求めることもできようが，農村社会の下層を占める農業労働者が親である4人の男子工のうち，ふたりが職業高校に進学していることを考えれば，学歴から出身階層を割り出すことは難しい（農業労働者の階層から高校進学は考えにくいからである)。しかし，親が農民である11人の男子工に，先に

11)　5人家族の世帯に必要とされる所有土地面積（米以外の消費物も米に換算して，ひとりあたり年間 240kg の米の消費を貧困線にしている）は以下の通りである。
0.5ヘクタール――肥沃で米の二期作が可能な水田。
0.6ヘクタール――乾田穴播き水稲栽培 (gogorancah) と，その後の食用畑作物の栽培 (palawija) が可能な天水田 (sawah tadah hujan)。
0.75ヘクタール――陸稲と食用作物の混作 (tumpangsari palawija) をする畑 [Indonesia 1982: 5]。

記したように，公務部門で働く親をもつ者と同様，高校進学者が多いこと（高校7人，中学3人，小学ひとり），また，親が農民である女子工の学歴が，同じく親が農民であるメイドの学歴よりも高いことから，同じ農家出身ではあるが，工場労働者の出身階層はメイドよりも高いと推測される。これは，フォーマル・セクターの就業者は一般的に，インフォーマル・セクターの就業者よりも出身階層は高いということであろう。メイドは工場労働者よりも低い階層であることを考えると，出身階層の低い者は，高い者とくらべて，現在の階層もより低いという，階層の水平移動現象がみてとれる。

6．家族状況

表8は，長子と長男・長女の比率を示している。男子の場合，長子の割合が女子よりも高い。これは，女子より男子の長子の方が，フォーマル・セクターに就業機会を得ることにより積極的であるからとも考えられるが，長子と非長子の学歴構成を示した表9にみるように，表8で長子の比率が大きいところは，学歴構成も非長子のそれより高くなっており（農村部で非農業部門で働く親をもつ男子のように，長子の比率は大きいが，学歴構成は非長子のそれより少々低くなっているという例外もあるが），家の経済事情が，非長子よりも長子の学歴により大きく影響するものと考えれば，長子に高い教育を授けるだけ

表8　家族状況

		農村	都市	ジャカルタ	農民	農業労働者
メイド	サンプル数	73	6	1	63	
	平均同胞数	5	4	10	5	
	出生順位	3	3	8	3	
	長子	13	1	0	13	
	%	17.8	16.7		20.6	
	長女	31	5	0	28	
	%	42.5	83.3		44.4	
女子工	サンプル数	28	15	9	15	1
	平均同胞数	6	8	5	6	6
	出生順位	3	4	2	3	3
	長子	6	2	4	4	0
	%	21.4	13.3	44.4	26.7	
	長女	8	4	5	5	0
	%	28.6	26.7	55.6	33.3	
男子工	サンプル数	50	27	45	11	4
	平均同胞数	6	7	6	6	6
	出生順位	3	4	3	4	1
	長子	19	9	17	1	3
	%	38.0	33.3	37.8	9.1	75.0
	長男	24	12	21	1	4
	%	48.0	44.4	46.7	9.1	100.0

（注）　農民，農業労働者数はいずれも，親の居住地が農村である者だけをしめしている。

表9　長子，非長子の学歴構成　　　（親の居住地別，％）

本人	メイド		女子工		男子工		男子工		男子工		男子工		女子工	
親	農業		農業		農業		非農業		都市		ジャカルタ		ジャカルタ	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
学歴	13	50	4	12	4	11	9	13	4	17	20	28	4	7
不就学	8	2												
不卒業	46	38									5	7		
小学卒	39	46	25	8	25	9				12	5	21		14
中学	8	12	50	75	25	27	33	23	25	24	30	36	25	43
高校		2	25	17	50	64	67	77	75	65	60	36	50	43
短大													25	

（注）　A――長子；　B――非長子。

の経済的余裕がある階層の親がより多くいたからであろう。ジャカルタ出身の女子工のうちで，他の出身者とくらべて長子の比率が大きいのも，同じ理由によるものと思われる。

女子の場合，ジャカルタ出身者を除いて，長子の比率にそれほど差はない。しかし，長女の比率が，農家世帯出身者が多いメイドのあいだではるかに大きくなっている。これは，表10にみられるように，非長女（二女，三女など），長女（非長子で長女である者），そして長子というように，同胞のなかでも年齢が上になるほど学歴が低くならざるを得ない下の階層の経済事情と，長女18人のうち妹をもつ者が14人（77.8％）いることなどを考慮すれば，自己の立身出世を目ざす余地のある上の階層出身者とくらべて，下の階層出身の長女においては，後方援助，つまり家族を経済的に援助しなければならないという経済的役割が大きいことをあらわしたものと思われる。

表10　農村部出身メイドの出生順別学歴構成

	長子	%	長女	%	非長女	%
不卒業以下	7	53.8	8	44.4	17	40.5
小学卒	5	38.5	7	38.9	16	38.1
中学	1	7.7	3	16.7	9	21.4

（注）長女――非長子で長女である者。
非長女――二女，三女など。

親が農民である男子工の場合，同じく農民の親をもつ女子工やメイドよりも，長子・長男の比率がともに小さいが，次に示すことがらから理解できるように，これは偶然のことと思われる。ジャカルタ流入直前の親が農民であるメイドの兄と姉の居住地を示した表11にみるように，長兄と長姉の居住地に大きな差異はなく，農村外に居住する場合，その大部分はジャカルタである。また，長兄と次兄，そして，長姉と次姉のあいだにも，居住地に大きな差異は見出されない（姉の方が農村外にいる比率が少々大きくなっているが，調査時点では，農村外の比率は，兄55.7％，姉55.3％で，兄姉間に差異はない）。離村率（出身地の農村に居住する人口と，農村外に居住する人口の比率）に男女間の差はほとんどなく，若い世代の農村外の主な移動先はジャカルタになっているといえよう。

表11　親が農民であるメイドの兄・姉の居住地（％）

	長兄 23	長兄―次兄 19		長姉 17	長姉―次姉 15	
農村（農業）	34.8	31.6	36.8	5.9	20.0	33.3
農村（非農業）	26.1	10.5	15.8	35.3	20.0	13.3
ジャカルタ	30.4	36.8	36.8	35.3	53.3	46.7
その他	8.7	21.1	10.5	23.5	6.7	6.7

（注）長兄―次兄――兄がふたり以上いる場合の出生順1番めと2番めをさす。長姉―次姉も同様。
非農業――男子の場合は学業，女子の場合は家事を含む。

表12は，親が公務部門（村長ひとり，区長ふたり，灌漑局職員ひとり）で働いているメイドの兄姉と，表11の出身地農村外（ジャカルタやその他の地域）に移住した兄姉の職業（メイドのジャカルタ流入以前のもの）を示している。既婚の姉が少なくなく，移住地が主に遠隔地（ジャカルタ9人，ジョクジャカルタふたり，ソロひとり，パレンバンひとり）であるが，彼女たちの移動の大半は，婚姻によるものではないと推測される。農村部出身の73人のメイドのうち15人に結婚歴があり，そのうち12人がジャカルタ流入後であったことは，先の推測を支持するものである。この12人中5人が同郷の夫をもつという事実は，姉たちのなかにも同様なケースが決して少なくないことを示唆し，移住後も出身農村の人間関係から全く疎遠でいられない環境をうかがわせる。

姉たちのなかで，親が農民であるケースで

表12　出身地農村外[a)]に居住するメイドの兄・姉の職業

親 職業	農 兄 29	民 姉 27	公 兄 6	務 姉 5
メイド	3	7		
商　業	3	4		
レストラン		2		
美容院				1
自動車修理工場	1			
運転手	8			
印　刷	2			
大　工	1			
地元工場	1	1		
外資系工場	1			1
私企業事務所	1		2	
公　務	4		2	
外島移住			2	
学　業				1
家　事		11		2
不就労	1			
不　明	3	2		

(注)　a) 表11のジャカルタとその他の地域をさす。

は，メイドやレストランなどの民間サービス業部門でも低階層に属する職種や商業に従事する者が大半を占めているのにくらべ，親が公務部門に従事するケースでは，サンプル数が少なく比較するのは困難であるが，外資系工場で働く者や学業中の者がいて対照的である。

一方，兄たちの場合，親が農民であるケースでは，運転手が多く，近代的職種への男子の対応の早さをにおわせる。また，外資系工場ひとり（調査時点では親は区長）や公務部門従事者4人（大蔵省職員〔長男〕，警察官〔長男〕，軍人〔長男〕，灌漑局職員〔本人は次男，長男は村長〕）もいるが，これは公務部門の就業機会が一般農家世帯にも開かれていることを示しながらも，比較的経済的余裕がある階層であることをにおわせている。[12)]親が公務部門に従事するケースでは，公務部門従事者ふたり（小学校教師，税務署職員），私企業事務所ふたりがおり，サンプルは少ないが，役人やホワイトカラー的な職種を好む傾向が強いと推測される。以上のように，親の職種により，村外へ転出した兄姉の職業にも傾向的違いが見出され，先の出身階層のところで述べたように，公務部門従事者の子弟にはフォーマル・セクターで働く傾向が大であり，農業従事者でも比較的経済的余裕がある世帯の子弟では，公務部門で働く希望が大であるとみてよいだろう。

親が公務部門で働く兄たちのなかに，政府による外島移住プロジェクトへの参加者がふたり（親は灌漑局職員，区長）いるが，これは，移住者が，広い土地を所有できるとか生活改善を目的とした農業労働者や他の下層農民だけではないことの例として注目してよい。

7.　年齢

仕事探しが目的でジャカルタに流入したときの平均年齢は，メイドの場合17歳である。彼女たちの学校での教育をおえたときの年齢をチェックしていないが，最終学年を年齢に換算する方法をとる（たとえば，小学校1年修了を7歳とする）と，学業修了平均年齢は12歳となり，先の流入時の平均年齢と5年の歳月があることがわかる。遅れて入学したケースや一時休学したケースがあると思われるので，実際には5年以下であろう。同じく

12)　村長や区長の子孫は，村長や駅長，農業省役人，税務署役人，教師などに在職し，一般農民世帯出身者は，一般に軍人や郵便局員（配達員）などになる傾向があるという［染谷　1980：42］。また，移住先での非農業従事者には公務などに従事する者が目につき，出身家庭は中層以上の経済的に比較的安定した世帯が多いという［加納　1979：163］。

表13　現在の職業の情報源　　(親の居住地別，%)

情報源	女子工場労働者				男子工場労働者			
	農村	農民	都市	ジャカルタ	農村	農民	都市	ジャカルタ
	24	16	10	11	37	15	21	48
同郷の友人	20.8	25.0	20.0	45.5	16.2	6.7	19.0	39.6
同　胞	25.0	18.8	10.0		8.1	6.7	4.8	10.4
親　戚	37.5	37.5	30.0	27.3	21.6	33.3	14.3	8.3
職業安定所	12.5	12.5	20.0	18.2	43.2	33.3	47.6	31.3
広　告								4.2
本　人	4.2	6.3	10.0		2.7	6.7		2.1
友人，隣人				9.1	5.4	6.7	9.5	
その他			10.0		2.7	6.7	4.8	2.1
不　明								2.1

(注)　女子の82%，男子の92%は，採用以前にすでにジャカルタに居住していた。
農民――親が農村部に居住し，農民あるいは農業労働者である場合。
広告――以前，工場労働者や事務職員の採用のために新聞への広告や学校への案内状が使われていた。現在は，事務職員採用のために短大への案内状が使われているという。

仕事探しが目的でジャカルタに流入した工場労働者が，それぞれの学校を卒業したものと仮定し，それから先ほどの換算をすると，女子の場合，2.6年（農村部出身），3.7年（親が農民），2.9年（都市部出身）となり，男子の場合それぞれ1.9年，2.7年，そして2.8年となる。中途退学のケースがあると思われるので，実際の年差は上記の数値よりも大きい。以上のことから，学業修了後短期間のうちにジャカルタ流入を果たした者もいるが，平均すればある年数を経たのちの流入であり，その期間は，農村部出身者の方が都市部出身者と比較して短いが，農家世帯の子弟にかぎればより長期であるといえるだろう。これには，非農業部門就業機会供給が需要と比較して少ないことが，非農業従事者子弟の農村外流出に拍車をかけていることと，そして，農家世帯子弟の学歴が相対的に低いということが背景になっているように思われる。

8.　情報源

仕事を探すということ，あるいは，本人にあう仕事を探すということは，難しいことである。まして，未知なる土地で仕事を探すとなれば大きな負担になる。幸いにも，農村には都市居住経験者や現居住者がいる。彼らは，これから都市部へ仕事を求めて流出する人々に，都市部での生活や就業機会に関する情報を提供する。農村部出身のメイド73人のうち，ジャカルタ流入以前にジャカルタに同郷の友人をもつ者は56人（76.7%）で，親戚62人（84.9%），同胞34人（46.6%）であり，以上の三者がいない者はひとり（1.4%）にすぎない。同胞の場合，兄だけのケースは農家9，非農家2；兄姉のケース，農家8；兄姉妹のケース，農家1；姉のケース，農家8，非農家4；姉妹のケース，農家1；妹のケースは農家1であり，兄や姉が中心となっている。[13)]

13)　メイドの斡旋業者 (makelar) も情報源であるが，これに依存する度合いは低いと思われる。彼らとのインタビューで以下のことを知り得た。
1.　男子と女子のメイドを紹介することを仕事とし，失業者救済を目的としている。
2.　ジャカルタに連れてくる以前に，両親や村長そして町内 (rukun tetangga) の代表から許可を得る。とくに，前二者は重要である。
3.　ジャカルタ到着後，女子は3日前後から，男子は1週間以内に雇主に連れられていく。
4.　雇主は，ジャカルタ到着までの運賃，到

表13は，工場労働者の現在の職業の情報源を示している。女子の場合，もっとも多い情報源は，親がジャカルタに居住するケースを除いて，親戚となっている。これに家族を加えると，農村部出身者では血縁関係が情報源の大半を占める。都市部出身者でも血縁関係が重要な情報源ではあるが，農村部出身者ほどではない。また，両者にとって，同郷の友人という地縁関係も重要な情報源である。

男子の場合，もっとも多い情報源は，親がジャカルタに居住するケースを除いて，労働省管轄下の職業安定所（Ditjen Binaguna）[14]である。次は血縁関係からの情報であるが，女子の場合と同様，都市部出身者よりも農村部出身者に目立つ。以上を全体としてみれば，ジャカルタに流入した工場労働者は，血縁や地縁関係に強く結ばれていて，血縁関係はとくに，都市部出身者よりも農村部出身者に，男子よりも女子に顕著であるといえるだろう。

一方，ジャカルタに親が居住するケースでは，男子でも女子でも，もっとも多い情報源は同郷の友人となっている。しかし，この場合，同郷の友人とはふつうの友人のことである。このことから，親がジャカルタに居住する若い世代にとって，もっとも多い情報源は友人関係であることがわかる。

III　おわりに

以上，ジャカルタ出身者や他の都市部出身者との比較を通して，農村部出身者の移動の背景や属性を不十分ながら明らかにしてきた。そこで得られたもののまとめを行い，本稿の結論にかえたい。

(1)　農村部出身者はインフォーマル・セクターに多く，これは都市農村間の教育水準の差を反映している。

(2)　大部分が，出生地から州境をはじめて越える移動でジャカルタに流入している。

(3)　ジャカルタ流入の主な動機は仕事探しであり，農村部（都市部でも）には十分な収入を得られる就業機会が不足している状況がある。

(4)　高校進学目的の移動者の親は，それぞれの地域で高い地位にある人である。

(5)　農村部では，男子とくらべて女子の教育に熱心でなく，高くても中学段階までであるという教育環境がある。

(6)　フォーマル・セクターで働く人は，厳しい就職事情を勝ち抜くために，一般的にジャカルタ出身者よりも高い学歴を備えている。

(7)　インフォーマル・セクターで働く人々のなかには，フォーマル・セクターに就業機会を得られるだけの学歴を有する者がいる。

(8)　職業学校進学者の大半は，専攻学科と直接関係のない職場に雇用機会を得ている。

(9)　親がフォーマル・セクターで働く世帯

着後雇われるまでの宿泊代，そして紹介料を斡旋業者に支払う。

5．親の職業でもっとも多いのは農業労働者（80%）で，つづいて商人（18%），その他（2%）となる。なかには，公務員や村長もいる。

6．ジャカルタに出てくる動機は仕事探しである。農村には仕事がない。

7．小学卒業以下の学歴が主で，中学卒は100人にひとりの割合である。

8．ジャカルタ居住の知人は，同郷の人だけである。

14）地方事務所は県レベルまであるが，すべての県にあるわけではない。求人募集はそれぞれの地方事務所の掲示板にのり，中央（ジャカルタ）の許可を得れば，他の州の地方事務所の掲示板にのせることができる。第4次5カ年計画遂行のための内閣の発足（1983年）以来，新聞にも公表され出している。表13の工場労働者たちは，ジャカルタ在の事務所でこの会社の求人募集の情報を得ている。彼らの学歴は小学から高校までまちまちで，特定の学歴への偏りはなかった。

の子弟は，男女とも同じくフォーマル・セクターに就業機会を求める傾向がある。

(10) インフォーマル・セクターで働く親は，子弟にはフォーマル・セクターに就業機会を得るように希望し，とくに男子に対してはそうである。

(11) フォーマル・セクターで働く親の子弟の学歴は一般的に，インフォーマル・セクターの子弟よりも高い（今回の調査対象であった工場労働者よりも社会的地位が高いと評価されている，他のフォーマル・セクターの職業につくためには，さらに高い学歴が必要とされ，公務部門で働く親の比率が大きくなるものと推測される）。

(12) 同じ農家世帯出身者でも，フォーマル・セクターの就業者は一般的に，インフォーマル・セクターの就業者よりも出身階層が上である。

(13) 出身階層と移動後の階層のあいだには，水平移動現象がある。

(14) フォーマル・セクターでは，女子よりも男子の方で長子の比率が大きい。これは，男子の方に，長子に高い教育を授けるだけの経済的余裕がある階層出身者がより多くいるからである。農家世帯出身者には，その階層の親をもつ者が農村外出身者よりも少なく，長子の比率が農村外出身の男子よりも小さい。

(15) 上の階層出身者とくらべて，下の階層出身の長女においては，家族を経済的に援助する経済的役割が大きいため，長女の比率は，フォーマル・セクターでよりもインフォーマル・セクターで大きくなる。

(16) 離村率に男女間の差はほとんどない。

(17) 公務部門の就業機会は一般農家世帯にも開かれているが，比較的経済的余裕がある階層である。公務部門で働く親をもつ子弟は，役人やホワイトカラー的な職業を好む傾向が強い。

(18) 学業修了後ジャカルタ流入までの期間は，農村部出身者の方が都市部出身者とくらべて短いが，農家世帯の子弟にかぎれば逆により長期である。これには，非農業部門就業機会供給が需要よりも少ないことが，非農業従事世帯の子弟の農村流出に拍車をかけていることや，農家世帯の子弟の学歴が相対的に低いことが背景にある。

(19) 地縁・血縁関係は，都市部出身者よりも農村部出身者において，また，男子よりも女子においてより強い。

参考文献

Ajik, Soeharti. 1983. Kondisi Kerja Pembantu Rumah Tangga di Suatu Pemukiman Elite di Surabaya. *Widyapura* 4(2): 15–31.

Heeren, H. J., ed. 1955. The Urbanization of Jakarta. Reprint from: *Ekonomi dan Keuangan Indonesia* 8(11).

———. 1979. *Transmigrasi di Indonesia.* Jakarta: PT Gramedia.

Indonesia, Biro Pusat Statistik. 1974. *Sensus Penduduk 1971: Penduduk D. K. I. Jakarta Raya.* Seri E No. 09. Jakarta: Biro Pusat Statistik.

———. 1978. Direktorat Jenderal Transmigrasi Propinsi Sulawesi Selatan. *Kertas Kerja, Latihan Transmigrasi Kantor Wilayah* No. 223/ST–PLPT/78. Jakarta: Pusat Latihan dan Penelitian Transmigrasi.

———. 1982. Tim Ahli BIMAS. *Usaha Penanganan Petani Berlahan Garapan Sempit.* Jakarta: Departemen Pertanian.

加納啓良. 1979.『パグララン――東部ジャワ農村の富と貧困』東京：アジア経済研究所.

———. 1981.『サワハン――「開発」体制下の中部ジャワ農村』東京：アジア経済研究所.

Mantra, Ida Bagoes. 1974. Population Movement in Wet Rice Communities: A Case Study of Two Dukuhs in Central Java. A dissertation proposal submitted to The Department of Geography, University of Hawaii.

Mayling, Oey. 1977. Jakarta Dibangun Kaum Pendatang. *Prisma* 6(5): 63–70.

Moir, Hazel. 1978. *Jakarta Informal Sector.* Jakarta: LEKNAS-LIPI.
Redmana, Han R. 1977. Perpindahan Penduduk di Indonesia. *Majalah Demografi Indonesia* 4(7): 42-64.
染谷臣道. 1980.「ジャワ農村の経済生活――ヨクヤカルタ特別区の事例から」『帯大研報』2 (5): 27-50.
Suharso; Speare, Alden JR; Raharjo, Yulfita; Redmana, Han R.; and Husin, Imron. 1981. *Migration and Education in Jakarta.* Jakarta: LEKNAS-LIPI.
Wirosoehardjo, Kartomo. 1978. *Prospek Urbanisasi di Indonesia dan Pengaruhnya Tenaga Kerja.* Jakarta: Lembaga Demografi, Fakultas Ekonomi, Universitas Indonesia.

〔新聞記事〕
Arah Program Transmigrasi Kini Sudah Benar. *Kompas.* May 28, 1982.